「ネオリアリズム」の提唱

雄国五郎

文芸は蘇りうるのか。文芸の小説分野は、死んだわけではなく、かつて、純文学・中間小説・大衆小説などとジャンルが分枝していた垣根がなくなって、拡散したに過ぎない。中でも純文学の衰退が目立ち、あたかも死んだかのように見えるのだろう。「純文学」なる分野の存在すら不確定な状況を否定できない。実際、純文学を扱う文芸誌の発行部数が激減していることは確かである。内容も、付随して倫理・哲学性が希薄になるなど、多様化して見解が様々である。ここでは、「純文学」の主題を念頭にささやかな私見を述べ、論議の火種にしたい。

若者が本を読まなくなった。読書をしなくなったのは、若者だけではあるまい。中年・老齢者も含めて「読む」ことをしなくなった。見ることで事足りるようになったからであろうか。おそらくはテレビの影響が最も大きいのだろうが、逆説的に、多すぎる雑多な出版物が氾濫しているという傾向にも原因があるのかもしれない。

音楽や美術は直接的な感覚によって享受できるが、文芸は想像や思考という「もう一段階」の作業なしには享受できない。この点は、文芸が他の芸術と根本的に異なる。「もう一段階の作業」をやっかいとするか、この作業を、むしろ味わうべきとするかは、読者の自由である。殊に、「純文学」の場合は、キーポイントになるのが、この点であろう。作家にとっても、読者にとっても、この「もう一段階」の方向が重要である。「読む」ことが「考える」ことに直結する場合と、歌や踊りの輪に加わるごとくする場合とでは、全く異なるからである。「この作品は面白い」という。「面白い」とは、興味を惹かれる意味だろうが、どのような点で心惹かれるのか。「新たな発見を与えられる」「気づかなかったことを気づかされた」という意味もあれば、「同化・同意を感じた」などの感慨から、「面白い」を感じ取る場合もあろう。

ところで、「純文学」の分野は、小説の他、随筆・エッセイ・紀行・詩歌などであろうが、それらが衰退したのだろうか。句誌・歌誌は相変わらず数多く出ているし、詩誌もいくつか送られてくる。同人誌も少なく

ない。しかも、紙質・装丁が立派で、参加している人たちの生活ぶりに余裕があることがわかる。

生原稿を綴じて回覧したとか、粗末な印刷で冊子をつくったなどという時代はもはや大昔で、印刷技術の大きな進歩によるばかりでなく、今日的な文芸は生活ぶりの反映であると思わざるをえない。しかも、自費出版による文芸作品の氾濫も目立つ。

そうした状況を見れば、文芸は衰退もしていなければ、虐待されているなどとはいえないだろう。むしろ優遇されているというべきだろうか。

「純文学」はいかにあるべきか。純文学の根幹は、「詩」である。「詩」は「批評」である。どのような形にしても、「批評」がなければ「純文学」になり得ない。

「書くこと」が、自己肯定や自己慰安のたぐいだったら、単なる「書き物」で、「純文学」にはなり得ない。「書き物」がどれだけ世にはびこっていることだろうか。それをあえて埋め立て地や焼却場へ運ぶ気にはならないが、「書く」者は、その目的意識は持たなければなるまい。

筆者は、北川冬彦主宰の『時間』の読者だったことから「ネオリアリズム」の傾向の詩を書いてきた。北川冬彦には「馬」（軍港を内臓している）という、一行詩がある。

北川冬彦は、ダダイズムから出発し、シュールレアリスムを経て、ネオリアリズムへ詩の改革運動を展開した。詩集に「検温器と花」などがある。

ネオリアリズムは１９４０年～１９５０年ごろ、イタリアで起こった思潮で、「構造的現実主義」。反ファシズム闘争が主流。映画では、デ・シーカの「靴磨き」「自転車泥棒」などが知られている。文学・映画はその影響を大きく受けた。

夥しい「書き手」の作品には、趣味・特技の披露であったり、役職歴の回顧談であったりが多く見られる。それらには老齢者らしい自己満足・自己肯定が多分に披瀝されていて、「批評」とは裏腹である。書くことのみならず、役職の肩書きにこだわりを持つ人も少なくない。町内会・同好会・同窓会等の役員を引き受け、相好崩して飛び回っている知人がいた。いっそ市会議員にでも立候補すればいいものを、と思ったほどである。

逆に若くて自我意識の強い者は、もっぱら物語のおもしろさを破天荒に描いて、鼻息を荒くしている。作者自身がその荒唐無稽に入り浸ってしまっているのだ。

純文学の「書くこと」には、思想が必要である。

かつて、勤務先で知り合ったＳさんは日本画家であった。あるときに、小田原板橋の散策に同行し、懇談した。Ｓさんが谷崎潤一郎の美意識を賛美したのだが、

それにひどく惹かれた。「美は、美であればいい」と彼は強調したのである。以後、しばらくの間、筆者はその帳のなかから抜け出せないほどであった。

田山花袋・島崎藤村らの自然主義から発して、武者小路実篤らの「白樺派」へ、そこからどこへと、模索中だった時期である。谷崎をはじめとして川端康成の「眠れる美女」を絶賛してみたりした。後にはその系譜を、中上健次に求めもした。しかし、「美」を振り切ったのは、椎名鱗三の実存主義小説だった。新たな「文学思想」との出会いは、彼の「深夜の酒宴」「重き流れの中に」であったと言っていい。「深夜の酒宴」の冒頭を読んだ衝撃は、数十年後のいまなお消えない。

「朝、僕は雨でも降ってゐるやうな音で目が覚めるのだ。雨はたしかに大降りなのである。それはスレートの屋根から、朝の鈍い光線を含みながら素早く樋へすべり落ち、そして樋の破れた端から滝となって大地の石の上に音高く跳ねかへって沫を上げてゐるように感じられる。しかもその水の単調な連続音はいつ果てるともなく続いてゐるのだ。ただこの雨だれの音にはどこか空虚ところがある。僕が三十年間経験し親しんできた雨だれの音には、微妙な軽やかな限りない変化があり、それがかへって何か重い実質的なものを感じさせるのだが、この雨だれの音はただ単調で暗いのだ。それはそれが当然なのであって、この雨だれの音は、このアパートの炊事場から流れ出した下水が、運河の石崖へ跳ね返りながら落ちていく音なのだ。

だが僕は、このアパートへ来て半年余りになるが、朝目を覚すと、それが下水の音と知ってゐながら、どうしても雨が降ってゐるやうな気分から脱することが出来ないのだ。それほど僕のゐるこのアパートには、あの雨降りの陰気な調子が建物全体に染みわたっているのある」

「小説ってこれなんだ」と思わず手を打たずにいられなかった。「美」でもなく、「人道主義」でもなく、風景や造形物の「礼賛」でもなく、現実に生きている真実味の人間の姿がそこには具現されていたのである。

言うまでもなく小説はフィクションである。仮想の構築は自由で、近松門左衛門が言うように「虚実皮膜」ウソとホントのすれすれの線をいくところに妙味があるといえるだろう。「僕」にとって、雨降りとは何だろう、どんな現実だろう、と読者は考え込まずにいられないのだ。それは新しい現実の世界である。自然主義の日常性でもなく、虚飾に満ちた美の世界でもなく、生々しい「個」の世界の造形に違いなかった。「あり得べき」「僕」の内奥に違いなかった。その「僕」が眼を光らせて外界を観るものは何だろうと考えると、慄然としたのである。

大根2

闇の中に　梅の枝が強靭に枝を這っている

それにぶら下がっているのは　ヤンクニという
新型爆弾だ
白いのはなぜだろう
安息の闇を奪ったのはこいつらの仕業だ
短い間に　夥しく白い大根は広がった
いつ誰がしかけたのだろう
都市（まち）を守るためというが
人々は震え上がっている
雨不足のこの頃
とりあえず水掛けを怠ってはなるまい

「僕」と「大根」。この無関係のものが、筆者の思潮では奇妙に結びつくのである。雨音に浸る「僕」の無用な存在は、味も栄養も乏しい水分豊富だけの「大根」と同化しないだろうか。強靭な枝を這った梅の木が傍若無人な大国だとしたら、それにぶら下がった「大根」は何だろう。大嘘つきは、どこにもいつの時代でもあり得る。何を信じるかはむつかしい。平凡な題材を持って何かしらの意味ある構築をしたい。詩において、思いがけない現実を構築するのは創作である。「何を訴えたいか」の主題さえ確定していれば、題材や表現の手法は自由であろう。